

---

# 銀魂王 - デュエルモンスターズ SD

黒神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂王・デュエルモンスターズ SD

### 【Nコード】

N1127Y

### 【作者名】

黒神

### 【あらすじ】

侍の国、そう呼ばれたのは20年前である。

あまんと天人と呼ばれる異星人達が襲来し、まもなく地球人と天人との間に十数年にも及ぶ攘夷戦争が勃発。

だが天人の絶大な力を見て弱腰になっていた幕府は、天人の侵略があつさりと受け入れ開国してしまい、攘夷志士達は弾圧の対象となつて、他の侍達もその多くが廃刀令により刀を失い、戦う気力を失っていた。

そんな時代に万事屋のオーナーにしてかつては攘夷戦争で数多くの天人を倒していき白夜叉と恐れられた伝説の武神 坂田銀時。

愉快的な仲間の地味でアイドルオタクのツッコミだけ一流の志村新八、宇宙最強生物、夜兎族やしこくの1人である神楽を初めとして、そんな時代でも豊かに暮らしていた。

そんなある日、江戸一番の発明家と呼ばれた源外が、新作発明機で思わぬ3人の人物を異世界からこの世界に呼び出した。

そう、遊戯王シリーズでも歴代の主人公である武藤遊戯、遊城十代、不動遊星の3人である。

彼等は漫画とアニメと言う架空の世界とは違い、実際に存在する異世界から飛ばされた同じ時代に生きる決闘者デュエリストである。

今、世界でも大ブームである『デュエルモンスターズ』で、我等が英雄、万事屋銀さんが遊戯達と共に闇にしそむ強大な敵に立ち向かう。

侍と決闘者デュエリストの共存の物語、ここに開幕！！

ID-1 新しい出会ってのは突然やってくる（前書き）

と言う訳で、何か白神さんの質問を見たら急に書きたくなくなりました。

銀魂と遊戯王の共存小説、是非とも見てください。

銀時  
デュエル  
「決闘開始！！」

## ID - 1 新しい出会いってのは突然やってくる

侍の国．．．．．そう呼ばれていたのは当の昔の話であった。

今は宇宙から天人あまんと呼ばれる者達が地球人と共存しており、文化も随分と変わり果てた時代である。

そんな時代の中、江戸の中にかぶき町という場所では『万屋銀ちゃん』と看板が書かれていた建物があつた。

『万屋銀ちゃん』．．．それは依頼と料金を受ければなんでもやる仕事である。

しかし依頼は滅多に無く、報酬もあまり手に入らない為、状況は普段最悪である。

食事すらまともに出来ない位営業是最悪である。

そんなある日．．．．．

「んで、話つてのは何だよ爺さん」

とめんどくさそうに言いだすのは我等が主人公。

彼の名は坂田さかた 銀時ぎんとき、『万屋銀ちゃん』のオーナーである。

好物は甘いものであり、血糖値が糖尿病寸前の領域に達しているほどの甘党である。

彼は今、江戸一番の発明家である源外の所にいた。

「いやあ、何か新発明を完成してな……漫画に出てくるキャラクタ―をこの世界に呼び出す『伽羅来来』<sup>ガラクタ</sup>を発明したんじゃが、何か失敗しててのう…壊れてしも右端じゃわい」

「はあ!？」

まさか漫画キャラを実際の人物のようにこの世界に転生させる装置を開発した事に呆れる銀時。  
そして源外の依頼は嫌と知る。

「要するに、その発明した機械カラクリでそいつ等の面倒を見ろって訳か？」

「そう言うことじゃ」

「ふざけんじゃねえよ!! 厄介ごとを俺に押し付けてるのと一緒じゃねえかあ!!」

コレには流石の銀時も怒鳴りだす。

如何に万事屋と言っても何でもやられ放題ではない。

「この依頼を受けてくれるんなら、今までの借金はチャラにしてやつても良いぞ？」

「ぐう……しゃあねえな!! んで何処のどいつだ、爺さんにこの世界に飛ばされた被害者は？」

もはやその人物を被害者としてみる銀時。  
すると……

「ぼ……僕達ですけど……」

「ん?」

と、銀時は声が聞こえた方向を振り向く。

そこには3人がいて、ありえない組み合わせが出ていた。

左から頭が尖がっていて学校の制服を着ている少年、赤い制服を着ていて明るそうな生活をしている少年、そして蟹の様な髪型をして



「だからよお、源外の爺さんが変な発明をしたせいでこいつ等この世界に飛ばされた被害者なんだし…察してやれよ」

「被害者なの！？異世界から人物じゃなく被害者扱い！？」

と銀時の被害者扱いに青ざめてツッコむ遊戯。

「まあしょうがないさ…俺達、源外って言う爺さんが発明した機械のせいで飛ばされたもんだしな」

「だから銀時さんから見ても、俺達は異世界に飛ばされたから被害者である事は否定できない」

十代と遊星がそう言うと、遊戯も納得する。

「じゃあお前等全員、私の部下アルからビシビシ鍛えてやるから覚悟するヨロシ」

「神楽ちゃん、いきなり遊戯さん達に失礼でしょうが！！」

と自信持って言いだすチャイナドレスの少女。

彼女の名は神楽<sup>かくら</sup>。

宇宙三大傭兵種族の一角『夜兎族<sup>やと</sup>』の1人であり人間離れをした怪力と身体能力の持ち主である。

見た目は可愛いらしい女の子だが、毒舌で大食いなのが玉に瑕である。

あいも変わらず毒舌言葉に新八は青ざめてツッコム。

「…ところで銀時、あの犬ってスゲエデケエなあ」

と十代が驚いて言いだし指を指すと、そこには白い巨大犬がいた。神楽のペットの定春である。

遊戯も遊星も驚き慢心であった。



「す…凄く大きい犬だね。これ、触っても大丈夫かなア」

「大丈夫アルよ、ちゃんとしつけしてアルから触っても大丈夫アル」

と神楽はニコツと笑って言いだす。

すると遊戯は勇気を持ってその犬に近づく。

「こ…こんにちは定春君…ぼ…僕は武藤遊…」

「ワン！」

パク！

「ぎ？」

と、突如定春が遊戯の頭を噛みだした。

『全然しつけになってないんですけどオオオオオ！！』

「定春、吐くアル！！勝手に人の頭を噛んじゃ駄目アルヨ！！」

十代と遊星も青ざめて叫びだし、神楽は定春にしつけをする。

定春が口から遊戯を吐くと、遊戯の顔中は唾だらけになって頭から血が流れて白眼となっている。

「…銀さん、何か遊戯さんも十代さんも遊星さんも、歴代主人公だから生きている時代が違うと思います…なのになんで当たり前のよう一緒にいるんですか？」

「実はなあ、源外の爺さんから聞くと…あの3人はアニメや漫画の側じゃなくて、実際に存在する異世界から同じ時代で生きている人物だそうだけ？」

「何ですかそれ？てか異世界存在してたんですか！！」

と小声で話をする銀時と新八。

源外の話から聞けば、『伽羅来<sup>キヤロライ</sup>』は漫画の世界からその人物をこの世界に呼び出す機械<sup>からくり</sup>ではなくて漫画に出てくる人物と同一人物を異世界からこの世界に飛ばす異世界転送装置だったようだ。

しかも壊れてしまい、開発するのに相当な時間はかかったので直すには時間がかかる。

「まあ、幸い江戸中でも最近デュエルモンスターズは流行っているし、遊戯さん達もこの世界で楽しく生きてくれますしね」

「キヤラ崩壊の責任は背負わなきゃな」

「止めてくださいよ銀さん、そんな事すれば遊戯王シリーズのバランスが壊れてしまいますよ」

「じゃあねえだろ？この小説は銀魂と遊戯王のクロスオーバーらしいし、もう誰かがキヤラ崩壊してるかもしれないからねえからよお」

「不吉な事いうなああああああ！！！」

と、銀時と新八が言い争っている。

神楽も定春の事を遊戯、十代、遊星に話をしていて何やかんやで賑やかである。

そんな中…

「誤用改めである、真撰組だあ！！！」

と、突如1人の人物が万事屋に現れた。

黒い服を着た短い黒髪、刀を左脇に身に付けている男が現れた。

彼の名は土方十四朗<sup>ひじかたとじゅうろう</sup>、真撰組の副長である。

真選組のナンバー2であり、周囲からは『鬼の副長』と呼ばれている。

万屋の銀時と似ており、彼とは対照的に瞳孔は開き気味である。

「何だ何だ、いきなりノックもせずに勝手に家に潜入ですかこの野郎？」

「うっせえ！！てめエが突然怪しい人物を連れて来ているって言うから確かめに来たんだ……て何で遊戯王シリーズに出てくる主人公達がここにいるんだ？」

「なり行きで」

「なり行きって何だよ！！全然わかんねえよ！！」

あいも変わらない銀時と土方の仲の悪さ。  
不思議そうにと遊星が新八に聞きだす。

「新八、誰何だあの人？」

「ああ、あの人はこの世界の真戦組と言う警察の副長でもある土方十四郎って人なんです」

「警察！？…まあ人は外見では判断できないと言っけどなあ」

土方が警察である事に意外そうに驚く十代。  
すると、神楽が意外そうに土方の左腕に装着しているデュエルディスクを不思議そうに見る。

「マヨラー、お前なんでデュエルディスクを付けているアルか？お前の決闘者アルカ？」

「ん…ああこれかあ……以前、ある事件で攘夷浪士共をとっ捕まえた時に所有している物の中にデュエルモンスターのカードがあったな……」

どうやら一応、調べたから偶然にも持っているだけだと新八達は思った。

しかし、土方の答えは予想外であった。

「そいつを偶然にも俺が預かって調べた所……はまってしまった訳だ」

「はまった!? あんた真撰組の鬼副長でしたよね!? カードゲームに興味なさそうな気がしましたけど!」

「うつせえなメガネ! はまったもんはしょうがねえだろうが!」

と、神楽の質問に答えた後にすぐに新八の意外そうな驚きに思わずツツコム土方。

「だから言つたら、人は見かけによらねえって」

と十代が新八に言いだす。

「真撰組の鬼の副長とあるう者が……他人から奪った物に興味心身とは堕ちるところも堕ちたもんだなあ」

「言ってる……それにこのデュエルディスクにセットされているデッキはそいつのデッキじゃねえ。俺自身が集めた真撰組デッキだ……最も万事屋ごときに縁がねえ話だがな」

と挑発するような言い返しをする土方。

それに対して銀時は……

「んだと? じゃあ俺は決闘者<sup>デュエリスト</sup>としての素質はてめエ以下って訳なのか!」

「……俺はそう言う風に言ったんだ、猿でも分かる事だろ?」

ブチィ!!

「上等だごるああああ!! だつたらこいつでテメエをぶちのめ

「してやるよオ!!」

と銀時は机の箱から、デッキ入りケースを取り出して土方に向ける。

「遊戯、デュエルディスクを貸せあ!!」

「は……はいいい!!」

遊戯は思わずデュエルディスクを外して、銀時に投げ渡す。  
そして銀時はデュエルディスクを左腕にセットして、そのデッキをデュエルディスクにセットする。

「面白エ、今度はカードで喧嘩って訳か……ちようど良い」

土方はにやりと笑ってヤル気満々をだす。

「てめエには山のように借りがある……この決闘デュエルで全てを返してやるぜ」

「ほざいてろ、てめエ何か楽勝に勝ってやるからなあ!」

まさに犬猿の仲の対決。

子供顔負けの大人気ない馬鹿決闘者デュエリスト2人が激突する。

「ふ……二人とも、何か怖い」

「……ひよつとして、あの2人は仲が悪いんですか?」

遊戯も少し怖がって、遊星は不思議そうに新八に質問する。

「ええ、あの2人は会う度に大人気ない理由でぶつかり合っんですよ……しかも雰囲気一緒に仲が悪いのも当然だしね」

「簡単に言えばあの2人は馬鹿ネ」

呆れて言い出す新八と神楽。

銀時がデュエルモンスターのカードを持ってた事にはまずツッコまずに新八は2人がまた大人気ない喧嘩を止める気にもならなかった。

「何か面白そうな決闘デュエルが見られそうのでワクワクするぜ」

と無邪気に笑い出す十代。

だが新八達は、2人の予想外の戦いに驚きだす事にはこの時まだ知らなかった。

銀魂と遊戯王の共存。

侍の魂を持つ男、坂田銀時のデュエリストとしての物語、ここに開幕する。

ID-1 新しい出会ってのは突然やってくる（後書き）

黒神

「と言いついで銀魂と遊戯王のコラボ小説の始まりです」

銀時

「つつか、お前他の小説は書かないんじゃないのか？」

黒神

「書きたくなつたんだからしょうがないじゃないですか」

銀時

「あ……そ、」

黒神

「なお、銀さんもマヨラーも使用するデッキはイメージが違いますので注目して待ってください」

前回のあらすじ

源外の新発明した機械からくりにより、何と異世界から武藤遊戯、遊城十代、不動遊星など3人の遊戯王シリーズ主人公達がかぶき町にやってきた。

しかも戻る方法が今の所無い為、しばらく万事屋の新社員として居候させる事にした。

さらに驚くべき事に、この3人はアニメも漫画の人物でもなく、実際に存在する似たような世界から飛ばされた上に同じ時代に生きている。

間違いなく異世界はアニメと漫画のストーリーとは大違いになっている。

とはともあれ坂田銀時はその3人を志村新八、神楽、定春にも紹介する中で、突如現れた真撰組の鬼の副長であり銀時の犬猿の仲とも言える仲がすごく悪い男、土方十四郎が現れた。

彼はとある事件で攘夷浪士から取り上げた今大ブームで江戸はもちらん世界中ではまっているカードゲーム『デュエルモンスターズ』にメツチャはまり、あげくにデッキも作り出した。

それを気に彼は銀時を見下した態度で挑発し、怒り出した銀時モデッキを取り出して彼に決闘デュエルを申し込むのであった。

後にコレが、坂田銀時の決闘者覚醒のきっかけとなり彼を中心とした決闘デュエルストーリーが始まろうとする事はこの時、誰も知る予知もな



か  
っ  
た。  
。

## ID - 2 遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500

「……で、何で私達まで見なきゃいけないのさ」

とタバコをくわえて呆れて言いだす老婆。

この方こそ万事屋の1階にあるスナックのママで万事屋の大家かぶき町四天王の1人であるお登勢。

困からは『女帝お登勢』という異名で通っている。

『お登勢』という名は源氏名であり、本名は寺田綾乃<sup>ていだあやの</sup>という。

「馬鹿共ノ喧嘩ヲ見テイルホド、私達ハ暇ジャアリマセン」

呆れて言いだす猫耳老婆、スナックお登勢の従業員であるキャサリン。

出稼ぎが目的で地球にやってきた天人でかつては『鍵っ娘キャサリン』の異名をもつ、窃盗団『キャッツパンチ』の一員でもある。

その頃の腕は衰えておらず、表向きは真面目な従業員のフリをしてスナックお登勢の金を強奪した事があるが、銀時達の活躍で御用となる。

釈放された後は改心し、再びスナックお登勢で働いている。

お登勢の事を尊敬しているが、性格は悪でメツチャ最悪である。

「しかしまさか、デュエルモンスターズが世界中で大ブームしているとは家、まさか銀時様も土方様もカードを持っていたとはたまも予想外でした。コレは新たなデータが必要ですね」

と分析を解説するように言いだす美少女。

彼女はたま。

正式名称は芙蓉伊<sup>ふようい</sup> - 零<sup>せろ</sup>號<sup>ごう</sup>試<sup>し</sup>作<sup>さく</sup>型<sup>がた</sup>。

林流山が病弱で孤独だった娘・芙蓉の為に造ったアンドロイドだが、今ではスナックお登勢の従業員でもあり銀時達の仲間の1人。

「いやあ、2人がどうしても広い場所で決闘デュエルしたいってので場所が無くて…」

「そこでこの場所でデュエルすることにしたアル…まったくあの2人の大人気なさは相変わらずネ」

苦笑して言いだす新八と呆れる神楽。

だが内心では2人がどんな決闘をするのか楽しみで仕方が無かった。

「にしたって、まさか銀時がカードゲームをするとは以外だネエ…それ買うぐらいの金があるんなら家賃払えつての」

と意外そうに言いだすお登勢。

彼女から見ても、銀時はカードゲームには興味ないと思えたからだ。

「うわあ、スゲエ楽しみイ!!」

「僕も興味あるな…この世界のデュエリスト達の実力がどれだけあるのか」

異世界から来た遊戯王シリーズの主人公の十代と遊戯も興味津々。

遊星はだんまりだが、その眼は2人の実力を真剣に測ろうとする眼である。

一方の銀時と土方はにらみ合っていて顔中に血管が浮かべている。

銀時は先ほどの土方の憎たらしい挑発に怒り出していて、土方はメツチャ銀時が気に入らない様子である。

「ひくじかゝた君、俺を怒らせるからには相当なまでに恥をかく覚悟は出来てるんだろっなあ！」

と血管を浮かべて笑顔で言いだす銀時。

「そりゃこつちの台詞だ…ここでためエとは決着をつけてやるよ！」

「舐めた真似言ってるじゃねえ！！幕府側だからっていい気になってんのも体外にするんだな！！！」

「幕府に逆らうってのか…だったらテメエをさっさと倒して切腹させてやりや！！！」

「ああ！！切腹するのも間違いだろっがよお！？？」

「もう良いからさっさと始めろよ！！！」

子供並の口喧嘩に顔中に血管を浮かべて怒鳴る新八。

「お…大人気ない…」

「大人気ねえな」

「お…大人気ないよ」

と遊星、十代、遊戯の3人も冷や汗かいて呆れて言いだす。

3人の言葉に新八達は頷く。

「…それじゃ、かぶき町決闘<sup>デュエル</sup>対決、開始<sup>デュエル</sup>イイイ！！！」

お登勢が叫びだして決闘<sup>デュエル</sup>開始宣言を言いだす。

そしてお互いにデッキからカードを5枚ドロ―して、決闘開始宣言をする。

『デュエル  
決闘！！』』

銀時 LP8000 手札5枚

土方 LP8000 手札5枚

「先行はくれてやるから、来やがれマヨラー！！」

「上等だ、行くぜ万事屋あ！！ 俺のターン、ドロー！！」

土方はデッキからカードをドローし、ドローしたカードをすぐさま召喚する。

「手札を1枚墓地に送って『THE トリック』を特殊召喚！！」

すぐさま手札を墓地に送り、そのまま1体の特殊な魔術師を召喚する。

顔に？のマークがついていて、衣装が変わっている。

攻撃力は2000でレベル5のモンスターがいきなり現れた。

「ちい…通常、レベル5のモンスターは1体のリリースが無きゃ召喚できネエけど…すぐさま召喚しちまった訳か」

「それだけじゃねえ…俺は墓地に送った『墓標の魔札』の効果により、デッキから魔法カード、または罠カード1枚を選択してセットする事ができる」

土方はデッキからカード1枚を選択して決闘盤にセットする。  
デュエルディスク  
しかもそれだけじゃない。

「チューナーモンスター、『ナイトエンドソーサラー』を召喚！」

さらに新たな魔術師を召喚する。

両手に鎌を持っていて、周りに蝙蝠が飛んでいる闇の魔術少年。

「チューナー、まさかシンクロ召喚!？」

新八は土方がシンクロ召喚してくることに注目する。

「レベル5の『THE トリック』にレベル2の『ナイトエンドソーサラー』をチューニング!！」

と『ナイトエンドソーサラー』は無数の蝙蝠に体中包まれて2つの輪となって『THE トリック』を包み込むと、『THE トリック』は5つの星と化す。

「魔法と騎士の魂の共存、聖なる魔法で魔を滅せよ！ シンクロ召喚!！ 誇り高き光『アーカナイト・マジシャン』!！」

光の柱が現れ、その中から1体の魔術師が現れた。

魔術衣装は何やら騎士の様なイメージで、杖も特殊な輝きを放つ宝玉を放つ。

かなり強そうだが、肝心な攻撃力は400とかなり低め。

「何だ何だ？レベル7の上级モンスターを召喚した割には攻撃力400って、全然大した事ネエな…て言いてえがそうじゃなさそうだな」

「ばっきやる！ そんなの当たり前だ!! このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ置き、こ

のカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は1000ポイントアップする！！」

「何い！？」

「てことは、今あのモンスターに乗る魔力カウンターは2つだから！！」

「攻撃力は2000ポイントアップするする！！」

アーカナイト・マジシャン ATK400 2400

いきなりの上級モンスターの召喚に驚く新八と神楽。  
ちなみに彼等もデュエルモンスターのカード知識は多少ある。

「だが先行の1ターン目は攻撃できない…俺はカードを1枚セットしてターンエンド」（手札2枚）

土方はターンを終了する。

いきなりの上級モンスターの召喚には銀時も苦戦するが…

「へ、いきなり上級モンスターを召喚したって全然意味ねえけどなあ…俺のターン、ドロー！！」

銀時も一気にカードをドローする。

新八達は銀時が一体どんなカードを使うのか来たいしまくりである。

「手札より永続魔法『カード・リミットブレイク』を発動。自分フィールド上にモンスターが特殊召喚される毎に、デッキからカードを1枚ドローする」

「なるほど、上級モンスターには上級モンスターで対抗する訳だな」

遊星は銀時が上級モンスターを召喚する事を確信する。

「さらに、手札より魔法カード『飛龍転生』を発動！相手にデッキからカードを2枚ドロウさせる代わりにデッキから融合を可能にさせて、エクストラデッキからレベル8以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する」

「ちい、テメエも速効召喚か！！」

舌打ちしながら、土方はデッキからカードを2枚ドロウする。

「行くぜ…デッキの『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』と『神竜・ラグナロク』を融合！！」

すると、突如銀時のフィールド上に現れた竜を支配する魔術士と東洋の神竜が現れ、時空の渦に飲み込まれて融合する。

「来い、『竜魔人・キング・ドラゴン』！！」

銀時が叫びだすと、フィールド上に1体のドラゴンが現れる。

上半身は人間で下半身は竜、そして右手に『ドラゴンを呼ぶ笛』を握っている。

攻撃力は『アーカーナイトマジシャン』と互角であるが、『キング・ドラゴン』には特殊な効果がる。

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドロウ！それで『キングドラゴン』の効果で、手札からドラゴン族モンスターを特殊召喚するぜ！！来い、『タイラント・ドラゴン』！！」



とフィールド上に現れたのは暴君の巨竜。  
レベル8で攻撃力2900とかなり協力である。

「凄い、銀さんの場に一気に上級モンスターが2体も召喚した!!!」  
「凄くネエ？アホノ坂田サン飛バシマクツテネエ？」

驚きを隠しきれない新八とキャサリン。

「そんで『カード・リミットブレイク』の効果で1枚ドロ。さらに魔法カード『爆裂龍霸弾』を発動!!!自分の場にレベル7以上のモンスターが存在する場合の身発動可能なカード、相手モンスターを全て破壊するぜ!!!」

「何イ!!!」

すると『タイラント・ドラゴン』が口から灼熱の炎を収束して徐々に貯めている。

このまま土方に相当な大ダメージを与えさせるつもりである。

「テムエの場をがら空きするぜ!!!」

「そうは行くか!!!畏カード『バスターモード』発動!!!」

すると、『アーカナイト・マジシャン』は大爆発する。

突如の大爆発に驚きだす銀時達。

そして、その爆風の中から『アーカナイト・マジシャン』が現れた。しかしその『アーカナイト・マジシャン』は何やらいつもの雰囲気と違っていた。

オレンジと青の印象が高い魔術衣装が目立つ。

「『アーカナイト・マジシャン』の姿が変わったアル!?!」

「『バスターモード』はシンクロモンスターを進化させる特殊な力

ード!!あれで『アーカナイト・マジシャン』は『アーカナイト・マジシャンノバスター』に進化したの!!」

神楽にバスターモードの説明をする遊星。

彼はシンクロ召喚のスペシャリストの為、シンクロの事なら何でも詳しい。

「こいつも『アーカナイト・マジシャン』と同じく特殊召喚されたターンに魔力カウンターが2つ乗り、魔力カウンターの数だけ攻撃力1000ポイントアップするぜ!」

すると『アーカナイト・マジシャンノバスター』に魔力カウンターが乗せられ、攻撃力が大きく上昇した。

アーカナイト・マジシャンノバスター ATK900 2900

「だが、そのまま消滅する事は変りはネエだろうよ!!喰らいやがれえ!!」

すると『タイラントドラゴン』は口から巨大な火球を放ち、その火球は土方のフィールドを焼き尽くして『アーカナイト・マジシャンノバスター』を焼き尽くす。

「よっしやー!!コレでテメエのモンスターはがら空きで大打撃…」

「畏カード、『悲劇の共存曲術・カラミティ・レクイエム』を発動

…自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターがカード効果で破壊された場合、破壊されたモンスターよりレベルが低い相手モンスターを全て破壊する」

「え?」

すると、何やら忌まわしき邪悪なる曲文字が銀時のフィールド上を包み込み、2体のドラゴンは悲鳴を上げて消滅していった。

「ああああああああああああああああああ！！俺のドラゴン達があああああああ！！」

「残念だがそれだけにあらず。『アーカナイト・マジシャン/バスター』は破壊され墓地に送られたとき、墓地から墓地から『アーカナイト・マジシャン』1体を特殊召喚する！ 蘇れ『アーカナイト・マジシャン』！！」

すると墓地から『アーカナイト・マジシャン』が蘇る。

魔力カウンターが2つ増え、効果によってその魔力カウンターの数だけ攻撃力が増幅し、攻撃力は2400となる。

アーカナイト・マジシャン ATK400 2400

「なんだい、せっかくの上級モンスターが台無しになったあげくに相手の場のモンスターも増えてきてるじゃないかい」

お登勢は呆れて言いだす。

銀時の場のモンスターは消えてなくなり、銀時自身も場はがら空き。

「先手は俺が取らせてもらう。無様にダイレクトアタックを受ける！！」

「誰がためえ何ぞに先手をやるかつつの！！手札の『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！！」

銀時は土方ごときに先手をもらうのは嫌で、すぐさま新たな上級ド

ラゴンを特殊召喚する。

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる!!!」

「だがその効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる!!!」

バイス・ドラゴン    ATK2000    1000    DEF2400  
1200

「だからどうした、俺は『カード・リミットブレイク』の効果で1枚ドローな」

「ちい、1ターン目で何枚カードを引きゃ気が済むんだ!!!」

何度もカードをドローする銀時に憎らしく睨む土方。

「シンクロにはシンクロだ：チューナーモンスター、『ガード・オブ・フレムベル』を通常召喚!!!」

フィールド上に通常チューナーモンスターを召喚する銀時。

現れたのは灼熱の炎に包まれたドラゴン。

守備力はかなり高めである。

「レベル5の『バイス・ドラゴン』に、レベル1の『ガード・オブ・フレムベル』をチューニング!!!」

「レベル6のシンクロモンスターを召喚するか!!!」

『ガード・オブ・フレムベル』は1つの輪となり、『バイス・ドラゴン』は包まれて5つの星と化す。

「全てを縛り付ける鎖よ、あの愚かな者に罰を与えよ、シンクロ召喚！！」

と輪から光の柱が現れ、1体のドラゴンが現れる。

「拷問せよ『<sup>チエーン</sup>C・ドラゴン』！！」

現れたのは、体中に鎖が縛られている竜。

Cシリーズでも最強のモンスターであり、攻撃力は2500と結構高め。

攻撃力は『アーカナイト・マジシャン』を上回る。

「ちい！！」

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカード1枚ドロいな。そんじゃ行くぜエ、『<sup>チエーン</sup>C・ドラゴン』で『アーカナイト・ドラゴン』に攻撃！！チエーンプラスト！！！」

と鎖竜が口からレーザー光線を放ち、それを『アーカナイト・マジシャン』を飲み込んで消滅する。

「ちい！！」

土方 LP：8000 7900

「それだけじゃねえ、こいつは戦闘ダメージを与えたら相手のデッキからカードを3枚墓地に遅らせる効果を持つてんだぜえ」  
「何だそりゃあ！？」

納得できないが、土方はデッキからカードを3枚墓地に送る。

「てかなんかあの俺様社長に似てねえ？ パワーとデッキ破壊コンボつてあの俺様社長に銀ちゃん似てね？」

「いやあ、さすがの銀さんもそこまでは…多分」

啞然としている神楽に、新八は流石に多分似てないと言いだす。

先手は銀時が取って、悔しがる土方を憎らしそうな笑顔で見る銀時。

「カードを1枚セットしてターン終了」（手札3枚）

ようやくターンを終えた銀時。

土方は憎らしそうに銀時を睨みつける。

「てめエごときに先手を取られるなんざ…俺もやきが回ったぜ…まあいい。一気に反撃させてもらうぜ俺のターン、ドロー！！」

土方は勢い良くデッキからカードをドローする。

ドローしたカードをみてにやりと笑う。

「今度はこつちの番だあ！！手札より魔法カード『古のルール』！！手札のレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する！！俺は『コスモクイーン』を手札から特殊召喚する！！」

「何イ！！」

と土方は手札から決闘盤デュエルディスクに強く叩きつけるようにと、フィールド上に宇宙を滑る女王の魔術士が光臨した。

「オオー、才登勢サン、アレハ『コスモクイーン』！！カツテハデュエルモンスターズ界最強ノ魔法使い族モンスタート恐レタ幻ノカードデスヨ」

「てか詳しいなキャサリン、お前もカードやってんのか？」

詳しくすぎるキャサリンに呆れるお登勢。

だが『コスモクイーン』のレア度はかなり高い。

「それだけじゃねえ、『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

フィールド上に、可愛らしい可憐な魔術士が姿を現す。

デュエルモンスターズのアイドルこと『ブラックマジシヤンガール』に似ている為、人気がある。

「さらに速効魔法『分身魔術』を発動。自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合のみ発動可能：ライフを800支払、通常召喚したモンスターモンスター1体を選択してその同名モンスター1体をデッキか手札から特殊召喚する！2体目の『マジシヤンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

土方はさらにフィールド上に2体目の『マジシャンズ・ヴァルキリア』を特殊召喚する。

土方 LP7900 7100

「げ、マジシャンズロックコンボー！」

「行くぜ、『コスモクイーン』でその鎖トカゲに攻撃、コスミック・ノヴァー！」

と、宇宙の女王は両手から漆黒の魔力を収束させて、そこから一気に魔力球を放ち、『C<sup>チェーン</sup>』を破壊する。

「はにゃああああー！」

銀時 LP8000 7600

「畏カード『ドラゴン・ホイッスル』！ドラゴン族モンスターが戦闘で破壊されて墓地に送られた場合、デッキか手札からレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する！！来い『レアメタル・ドラゴン』！！」

銀時のフィールド上に1体の鋼の竜が光臨する。

レベル4にして攻撃力2400。

ほぼレベル5・6級だが通常召喚ができないのが欠点である。

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドローする……」

「ち、また手札増幅効果が…しかも攻撃力2400じゃ対抗できねエ…カードを1枚セットしてターンエンド！」（手札1枚）

土方はとりあえずターンを終了する。

新八達は銀時と土方の使用デッキ内容を確認する。

「へえ、銀さんはドラゴン族を中心としたパワーデッキに土方さんは魔法使い族を中心としたバランスデッキですか…」

「つうか侍の癖に戦士族デッキを使わないなんて…イメージ合っていないアル」

「まあまあ、人は見かけによらねえって」

新八と神楽は意外そうに2人のデッキを見て、十代が苦笑して言いだす。

「だけど、2人の実力は中々の者だ。銀さんは上級モンスターを低



級モンスターのようには召喚する上、「カード・リミットブレイク」の効果で特殊召喚するたびに手札消費のデメリットを打ち消している」

「土方さんもカードの連携が上手くいって、攻撃も護りも優れてる。攻撃力の高い『コスモクイーン』に2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』は自分以外の魔法使い族モンスターを攻撃させないから、2体そろった事で無敵のマジシャンズロックが完成されている」

遊星も遊戯も認めるほど、銀時と土方のデュエリストレベルは高いのである。

「データを分析します。銀時様は攻撃力高めのドラゴン族を中心とし、さらにデッキ破壊コンボもあるパワー&クラッシュドラゴンデッキを使用し、土方様は魔法使い族を中心とし魔法カードの連携を特化したバランスデッキを使用。2人の実力はAAランクでプロ級の実力を誇っています」

とタマが分析するように言います。

ちなみにこの小説のデュエリストの強さはEX〜Fで決定される。

F・E・D・C・B・BB・A・AA・AAA・S・SS・SSS・  
EX

弱い                      強い

Fは最低級ランク

E・Dは低級ランク

B・BB・Aは中級ランク

AAAは上級ランク

SSSは最上級ランク

EXは最強ランク

と、このように強さのランクが決闘者としての強さが決められている。デュエリスト

銀時とひじからは上級ランクである為、プロ級に入る。

「行くぜ、俺のターンドロー!!」流星竜・スターメテオワイバー  
』を特殊召喚」

と、銀時の場に流星の如く振ってきた隕石の竜が現れた。

烈火の様な瞳に鋭い目線。

体中が燃えていて翼が4羽生えている翼竜。

そして尻尾の先には隕石が埋まっている。

「『カード・リミットブレイク』の効果でカードを1枚ドロウ!!  
こいつは自分の場にドラゴン族が存在する場合、手札から特殊召喚  
ができるカード。しかもこいつはこの効果で特殊召喚した場合、自  
分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体のレベルを1  
つ上げるか下げる事ができる!」

「狙いは…レベルを下げるほうか」

「ああ…」

と憎たらしく答える銀時。

すると『レアメタルドラゴン』のレベルは4から3に下がる。

レアメタルドラゴン 4 3

「レベル3となった『レアメタルドラゴン』と『スターメテオワイバーン』をオーバーレイ・ユニット!!」

「オーバーレイ・ユニット!?!」

「ま…まさか!!」

新八と神楽は驚きだす。

そう、銀時の狙いは新八と神楽でさえもつい最近知った新しい召喚方法である。

2体のモンスターが光の球体と化して円を描くように高速に回りだす。

そして銀時の場が何かブラックホールのような空間が現れる。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットアイを構築!! エクシーズ召喚!!」

3つの球体がブラックホールに飲み込まれ、そのブラックホールが大爆発して中から1体のモンスターが現れる。

「現れよ、『<sup>ナンバーズ</sup>NO.17 リバイス・ドラゴン』!!」

と、フィールド上に現れたのは6羽の翼が生えていて海竜とも言える強力なドラゴン。

<sup>ナンバーズ</sup>角にNO.17と刻まれていて周りに光の球体が回っているエクシーズモンスターである。

「…エクシーズ召喚!?!」

「うはあ、スゲエぜ銀さん!!この世界にはそんな召喚方法があったんだなあ!!」

「エクシーズ召喚…同じレベルのモンスターを2体以上素材として召喚する新型モンスター…まさかこの眼で見られるとは」

遊戯と十代は知らず、遊星は噂に聞いた事があるので驚きだす。

「け…まさかエクシーズモンスターまで持っていやがるとは…だが攻撃力2000程度のザコモンスターで何が出来る?」

「悪いな、俺のデッキにはザコなんていねえよ…『カード・リミットブレイク』の効果でカードを1枚ドロー!!」

銀時はそう言っただけからカードを1枚ドローする。さらにすぐさまモンスターを召喚する。

「『アタッチメントドラゴン』を召喚!!」

小さき蒼い翼竜が姿を表すと、素早く宇宙の女王を密着して攻撃態勢から守備体制に変える。

「てめエ、何をしやがる!!」

「こいつは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、相手モンスター1体に装備カードとして装備することができるモンスターだ…パワーだけがドラゴンの特徴じゃないからなあ」

「チィ…それでも守備力は2450…万事屋の場にはザコドラゴンだけ!!」

「あめえよ!!」

すると、『リバイス・ドラゴン』が光の球体を加えると攻撃力が増

幅した。

ナンバーズ

No. 17    リバイス・ドラゴン    ATK 2000    2500

「何！？攻撃力が上がりやがった！！」

「『リバイス・ドラゴン』はオーバーレイを1つ取り除く事で、攻撃力が500ポイントアップするんだぜ」

攻撃力が上がって、青き竜の攻撃力が宇宙の女王の守備力を上回った。

「そのジャマくせえ効果は消えさせてもらっぜ…速効魔法『魔風結界』…このターンの間だけ、相手フィールド上に存在するモンスターの効果は無効化する！！」

「てめえ！！」

「コレでジャマなロックコンボは消えた！！いくぜ、『リバイス・ドラゴン』で『コスモクイーン』に攻撃！！バイス・ストリーム！！」

すると『リバイス・ドラゴン』は口からとてつもない波動砲を放ち、『コスモクイーン』は悲鳴を上げて消滅した。

「テメエ…だがいい気になるなよ…罨カード『命の綱』！！戦闘でモンスターが破壊された場合、手札を全て墓地に送る事で破壊されたモンスター1体を攻撃力800ポイントアップして特殊召喚する！！蘇れ、コスモクイーン！！」

すると、命の綱が土方の墓地までつながり、その綱を宇宙の女王が

捕まっつて生還した。

コスモクイーン ATK2900 3700

「はぁ！？そんなんで言い気になるなよ？速攻魔法『烈風』！！  
相手の場にレベル5以上のモンスターが特殊召喚された場合、その  
モンスターをゲームから除外して相手に1000ポイントのダメー  
ジを与える！！」

「何イ！！」

突如発生した突風に、『コスモクイーン』は吹き飛ばされて消滅す  
る。

しかもその衝撃が土方に襲ってダメージを与える。

「ぐぎゃああああ！！」

土方 LP:7100 6100

「ぶはははははははははは！！ これで形勢逆転だなあ！！ター  
ンエンド！」（手札3枚）

「にゃろ……俺のターン、ドロー！！」

土方はカードを1枚ドローすると、ドローしたカードを見てにやり  
と笑いだす。

「立ったらこいつを喰らいやがれ！！永続魔法カード『連携魔法発  
射』！！自分フィールド上に魔法使い族モンスターが2体以上存在  
する場合のみ発動可能！！攻撃できない代わりに相手に800ポイ  
ントのダメージを与える」

「何イイイイ！！」

「喰らえええ!!」

すると2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』は2つの杖を×型に合わせて、その先から魔力を収束し一気に魔力弾として銀時に向けてはなつた。

「ぎゃあああああああ!!」

銀時    LP：7600    6800

またもやダメージを受けた事に苦しむ銀時。

しかも『魔風結界』の効力が切れて再びマジシャンズロックコンボで土方のモンスターに攻撃する事ができない。

「この俺がテメーごときに負ける事はいえねえよ…さつさと無様に負けちまいやがれ」

「にやろー!!」

土方は銀時とは対極に技で対抗する。

パワーなら銀時、カード連携なら土方の方が上のようなのだ。

「ちよつと、銀時やばいんじゃないかい？」

お登勢が啞然と言いだし、銀時が不利になつてると思い込む。

「確かに、2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』の効果で銀時さんは攻撃できない上、しかも永続魔法の『連携魔法発射』は魔法使い族モンスターの数だけ相手に400ポイントのダメージを与えるカード」

「攻撃もできずにダメージを受け続けるだけじゃ、流石の銀さんも

不味いんじゃないネエ？」

遊星と十代もお登勢と同じく銀時の不利さにやばそうに思う。

「でも銀さんの手札は3枚もあって、あの中に逆転の手口があればいいんだけど…」

遊戯の言うとおり、銀時はまだ手札が3枚もあり次のドローフェイズ時には4枚となる。

何か破壊形のカードさえあれば良いと思う。

「行くぜ、俺のターンドロー！！」

ドローしたカードを見て、銀時はにやりと笑いだす。

「そのうざってえカードを一気に破壊してやるぜ…魔法カード『スタンピング・クラッシュ』！！ドラゴン族が存在する場合、フィールドの魔法・罫カード1枚を破壊して破壊したカードのコントロールに500ポイントのダメージを与える！！」

「上手い、これで『連携魔法発射』は破壊される！！」

新八は感心して叫び、『リバイス・ドラゴン』は翼を羽ばたかせて烈風を放つ。

「さあ、その『連携魔法発射』は退却だ」

「アホか…んなもん効くか」

「へ？」

何と、烈風が止んだ後も『連携魔法発射』は破壊されてない。



「嘘オオオオ！！何でエエエエ！！」

「こいつが『連携魔法発射』のもう1つの効果だ。自分フィールド上に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、墓地の魔法カード2枚をゲームから除外する事で破壊を無効にする」

と土方は墓地から『墓標の魔札』と『分身魔術』が除外される。

銀時は舌打ちして『リバイス・ドラゴン』の効果を発動する。

「だったら『リバイス・ドラゴン』の効果発動し、オーバーレイユニットを取り除いて攻撃力アップ！！」

『リバイス・ドラゴン』は光の球体を喰わえて攻撃力をさらに増幅した。

これにより、『リバイス・ドラゴン』の全てのオーバーレイユニットが消えた。

ナンバーズ

No.17 リバイス・ドラゴン ATK2500 3000

「『リバイス・ドラゴン』は、オーバーレイユニットがなくなると直接攻撃することができないデメリットを持っています。しかし相手が強力なモンスターを召喚してくるのを警戒に、銀時様は『リバイス・ドラゴン』の攻撃力をさらに上げて守りを固めました」

「攻撃は最大の防御：確かにコレなら攻撃力3000以上のモンスターが現れない限り、破壊されない」

たまも遊戯も、銀時のナイスアイデアと思いだす。

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド！」（手札2枚）

「どうしたどうした、さっきの勢いは何処行つたあ！！俺のターン

ドロー！！！！」

土方はデッキからカードをドローする。

「『連携魔法発射』の効果をくらえやああああ!!」

と再び、2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』が魔導砲を放ち、銀時に直撃する。

「ああああああああ!!」

銀時 LP：6800 6000

「ターンエンド」(手札1枚)

とても自慢げに言いだす土方。  
額に血管を浮かべている銀時は絶対に土方に眼に者を見せようと考  
える。

「くそがア、俺のターンドロー!!」

と銀時は一気にカードをドローすると、ドローしたカードを見てにやりと笑う。

「チューナーモンスター『ドレット・ドラゴン』を召喚!!」

すると、フィールド上にあられたのは悪魔の翼が生えていて、紫色の  
人型のドラゴン。

尻尾は鞭のように長くて先に棘がついている。

「今更チューナーモンスターでなんになる!?! エクシーズモンスター

「はレベルじゃなくランクと言う特殊な を抱えてんだ…だからリバイスドラゴンをシンクロ素材には出来ねえよ!!」

「誰がシンクロモンスターを召喚すると言った？俺は『ドレット・ドラゴン』の効果を発動…1ターンに1度だけ、フィールド上の魔法カード1枚をそのまま墓地に送る」

「なあ!？」

「破壊は防いでも、そのまま墓地退却効果はねえだろうがぁ!!デス・ダークウィップ!!」

すると、ドレット・ドラゴンの尻尾が鞭の様に振られ、先つちよの棘が『連携魔法発射』を串刺しして消滅させる。

「上手い、その手があつたか!」

「破壊するのとそのまま墓地に送るのは全然違うネ!銀ちゃん、ナイスアル!!」

銀時の反撃に喜びだす2人。

しかもそれだけじゃない。

「それだけじゃねえ…魔法カード『火竜の火炎弾』を発動…こいつでデメエに800ポイントのダメージを与えてやるぜ!!」

「なあ」

と、『リバイス・ドラゴン』が口から火炎弾を放って土方にダメージを与える。

「ぎゃあぁ!!」

土方 LP6100 5300



「2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』と『魔導騎士 ディフェンダー』をオーバーレイユニット!!」  
「何イ!!」

土方もエクシーズ召喚を仕掛けてくる。

すると、3体のモンスターが光の球体と化して円を描くように高速に回りだす。

そして土方の場もブラックホールのような空間が現れる。

「3体のモンスターで、オーバーレイネットアイを構築!! エクシーズ召喚!!」

3つの球体がブラックホールに飲み込まれ、そのブラックホールが大爆発して中から1体のモンスターが現れる。

「いでよ!! 『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』!!」

現れたのは、青と紫をイメージした魔術衣装に、魔力カウンターが乗った大斧『バルディッシュ』に烈火に輝かせるサラサラとしたロングヘアで翡翠色に輝く瞳をしている美しい美女。

その攻撃力は3000。

最上級魔導士がフィールド上に光臨した。

「すごい、土方さんもエクシーズ召喚をして来ましたよ!!」

「攻撃力3000…しかも3つのオーバーレイを持っているからかなり強力な効果を持っているかもしれない」

『リバイス・ドラゴン』に匹敵する攻撃力に新八と遊戯は驚きだす。

しかも攻撃力が同じとはいえ、『バルディッシュ・エニユオ』には厄介な効果がある。

「行くぜ、『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』で『鋼鉄の魔導騎士・ギルティギア・フリード』に攻撃!!」

「何でアル!? 攻撃力は『リバイス・ドラゴン』と互角のはずなのにそのまま攻撃ってありえないヨ!!」

攻撃力をアップしてからの攻撃なら分かるが、まさかこの場で攻撃してくるなんてありえなかった。

「『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』の効果を発動!! このカードのオーバーレイを1つ使い、攻撃対象のモンスターの攻撃力をダメージ計算時の間だけ0と扱う!」

「何だとお!?!」

すると、土方は『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』のカードの下に重ねておいてある『マジシャンズ・ヴァルキリア』を取り出す。

そして『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』に浮いている3つの球体の内1つが『リバイス・ドラゴン』に直撃し、『リバイス・ドラゴン』の力が消耗する。

リバイス

No. 17    リバイス・ドラゴン    ATK 3000    0

「攻撃力が0に下がった!!」

「セコクネエ！？アノ効果セコスギジャネエ！？」

いくらなんでも攻撃力を0にする効果は反則だとキャサリンは言い  
だす。

遊星はあれがエクシーズモンスターの力と驚きだした。

「行くぞおらあ！！フォトン・ヴブウメセンブレイカー！！」

魔力を込められたバルディッシュを振って、紫色の発光斬撃を放つ。  
そして『リバイス・ドラゴン』がその斬撃によって破壊される。

「はんぎゃああああああああああ！！」

銀時    LP：6000    3000

「銀さん！！」

「なんだい、攻撃力0の攻撃表示モンスターを攻撃するのってダイ  
レクトアタックと一緒にじゃないかい」

新八は大ダメージを受けた銀時に驚き、お登勢はダイレクトアタッ  
クと変わらないと言いだす。

「これがめエと俺の力の差だ…絶対的な強さを持った奴に勝とう  
なんざ不可能な事だ」

と土方はタバコを加えて銀時を見下し返す。

衝撃によって吹き飛ばされた銀時は流石に怒りだす。

「てめエ、立つたらその絶対的な強さつてのがどんなのかを教えてくださいよ…俺のターン、ドロー!!!『ドルドラ』を召喚!」

すぐさま『ドルドラ』を召喚する銀時。

双頭の竜がフィールド上に舞い降りて、土方を睨む。

「シンクロモンスターを召喚するつもりか…だが『ドルドラ』と『ドレット・ドラゴン』の合計レベルは5…レベル5のシンクロモンスターなんか、『バルディッシュ・エニユオ』の前ではザコ当然」「何言つてんだよ…カードにザコは存在しねえよ…弱いカードをザコって言う奴がザコ何だよ」「……………」

と銀時の言葉に無言ながらも感心する遊星。

「それになあ、この2体のモンスターもどんなにザコと呼ばれようが、どんなに弱エ奴だろうが…力を合わせりゃ、強大な力を生み出す事だつて出来んだぜ?魔法カード『ドラゴニック・タクティクス』を発動!

「…2体のドラゴンをリリースする事でデッキからレベル8のドラゴン族モンスターを召喚するカードか?」

「そうだけ…この2体がフィールド上にそろった事でこのカードの発動条件を揃わせたぜ」

と『ドレット・ドラゴン』と『ドルドラ』はリリースされて、フィールド上に1体のドラゴンが光臨される。

「さあ、俺のエースモンスターの光臨だ」

「エースモンスター!?!?今までのより強力なモンスターが存在するんですか!?!?」



とまさかの銀時のエースモンスター宣言に注目する新八。  
『キング・ドラゴン』・『タイラント・ドラゴン』・『リバイス・ドラゴン』をも凌ぐ銀時のエースモンスター。  
それは絶対に強力なカードに違いない。  
そして銀時が召喚するモンスターは…

「究極の白き生命体を見せてやるよ……今こそその孤高なる姿を俺の前に姿を現しやがれ！！」  
『ブルーアイス・ホワイトドラゴン 青眼の白龍』  
『え！？』

と、銀時が宣言したカードに唖然とする新八達。

銀時がそのカードを決闘盤にセットすると、フィールド上に1体の  
美しき白き龍が光臨した。

純白に輝くその体、サファイアの如く輝きだす青き瞳を宿す美しき  
白龍。

そのなは『ブルーアイス・ホワイトドラゴン 青眼の白龍』。

通常モンスターの中でも攻撃力は最も高く、伝説のレアカードの1枚である。

「……………え…『ブルーアイス 青眼』？」

と唖然と口にする新八。

何処をどう見ても銀時が召喚したのは『ブルーアイス・ホワイトドラゴン 青眼の白龍』である。  
伝説とも言われる白き龍を、我等が万事屋の銀さんが召喚したのだ。

「……………嘘オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？ちよ、『ブルーアイス 青眼』って何イイイイイ！！何で伝説のレアカードを銀さんが持って

いるのオオオオー!!」

「マジでありえないね? てか完全に銀ちゃん社長キャラアル!!」

「お前、まさかそれ本物なのか?」

新八、神楽、土方でさえも驚きを隠しきれない。

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

『青眼の白龍』、江戸はもちろん世界でも『遊戯王』を代表とするレアカードの一枚であり、通常モンスターの中でも最強と言う名が高い存在名だけじゃなく、世界でも経った4枚しかない幻のレアカード。

コレにはこの決闘を注目してきているかぶき町の一般人もまさかのブルーアイズ『青眼』の存在に歓喜に騒ぎ出す。

「まさか、銀さんがブルーアイズ『青眼』使いだったなんて!!」

「スゲエぜ銀さん!!」

遊戯も十代もはしゃぎ、遊星も驚きの余りにだんまりとなる。

お登勢、キャサリン、たまもあんぐりしていた。

「マジアルか!社長の切り札アルか!??」

「ちよっとー!! 銀さんと全然イメージ合わないじゃないですか

!??」

「うつせー!!銀さんのイメージカラーは『白』だから、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン『青眼の白龍』の『白』と合うんだよ!!イメージ合うんだよ!!」

と神楽と新八の言い分に、銀時も怒鳴って叫びだす。

「たくよお、んで『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドロウする!!」

銀時は勢い良くカードをドロし、ドロしたカードを見てニヤリと笑う。

「装備魔法『ドラゴンの秘宝』…これで『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>の攻撃力と守備力300ポイントアップ!!」

<sup>ブルーアイズ・ホワイトドラゴン</sup>  
青眼の白龍 ATK3000 3300 DEF2500 2800

「げえ、『バルディッシュ・エニユオ』の攻撃力を上回りやがった!!」

「喰らえやあ!!」<sup>ブルーアイズ</sup>  
「青眼」で『バルディッシュ・エニユオ』に攻撃!!  
滅びの爆裂疾風弾!!」

と、『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>が口から白い粉子を大量に収束して溜め続け、そして一気に巨大な白き閃光を放つ。

その閃光に『バルディッシュ・エニユオ』は飲み込まれて消滅する。

「ぢいいいい!!何て威力だ!!」

土方 LP:5300 5000

「ふははははははははは!!マヨネーズがゴミのようだあああああああ!!」

「て何だその『人がゴミのようだ』って言う言い方!?しかもマヨネーズがゴミってどう言うことだアアアア!!」

マヨネーズ侮辱宣言に怒鳴る土方。

何せ極度のマヨラーである。

そしてこの銀時の『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』が、後に彼をデュエリスト決闘者としての道を  
進ませる事になる。

登場オリカ紹介

墓標の魔札 通常魔法

『手札からこのカードが墓地に送られた場合、デッキから魔法カード、または罫カード1枚を選択してセットする事ができる』

カード・リミットブレイク 永續魔法

『自分フィールド上にモンスターが特殊召喚される毎に、デッキからカードを1枚ドロウする』

飛龍転生 通常魔法

『相手はデッキからカードを2枚ドロウする。』

その後、デッキから融合モンスターカードによって決められたカードを墓地に送り、レベル8以下のドラゴン族の融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、特殊召喚されたターン、攻撃できない。(この特殊召喚は融合召喚扱いとする。)

爆裂龍霸弾 速攻魔法

『自分フィールド上にレベル7以上のドラゴン族モンスターが存在する場合のみ発動可能。』

相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター全てを破壊する。』

分身魔術

『自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合にレベル4以下のモンスターを通常召喚した場合のみ発動可能。』

ライフを800支払い、通常召喚したモンスター1体をデッキから手札から特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。』

流星竜 - スターメテオワイバーン 3 光属性 ドラゴン族 ATK1300 DEF1400

『自分フィールド上にドラゴン族モンスターが存在する場合、手札からこのカードを特殊召喚する。  
この効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上に存在するモンスター1体のレベルをターン終了時まで1つ上げるか下げる事ができる』

アタッチメント・ドラゴン 1 風属性 ドラゴン族 ATK100 DEF100

『このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、相手モンスター1体に装備カードとして装備することができる。  
このカードを装備したモンスターの表示形式を変更する。以後、このカードを装備したモンスターは表示形式の変更ができなくなる』

## 烈風 速効魔法

『相手の場にレベル5以上のモンスターが特殊召喚してきた場合の

み発動可能。

そのモンスターをゲームから除外し、相手に800ポイントのダメージを与える』

連携魔法発射

永続魔法

『1ターンに1度だけ、自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターの数×400ポイントのダメージを相手に与える。』

この効果を発動したターン、そのターン攻撃できない。

相手のターンでこのカードが破壊される場合、1ターンに1度だけ墓地に存在する魔法カード2枚をゲームから除外してその破壊を無効にする』

ドレット・ドラゴン                    2    闇属性    ドラゴン族    攻撃力800  
守備力1200

効果・チューナー    1ターンに1度だけ、フィールド上に表側表示で存在する魔法カード1枚を選択してそのまま持ち主の墓地に送る。

魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ                    4    闇属性    戦士族  
ATK3000    DEF2500

エクシーズ：    4の魔法使い族または戦士族モンスター3体

『このカードはエクシーズ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの種族は魔法使い族としても扱う。

このカードが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合、自分のターンのメインフェイズ1時にこのカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、そのターンの終了時までそのモンスターの攻撃力を0として扱う。

このカードは相手の罠カードの効果を受けない』



ID - 2 遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500（後

坂田銀時

使用デッキ 『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』を中心としたドラゴン族デッキ

デッキ名 『万事屋白龍で粉碎 爆砕 大爆砕』デッキ

主力カード 『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』

『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』

次回もお楽しみ

銀時

「俺が『ブルーアイズ青眼』デッキを使用するってわけか：いやあ、俺はてつきり『六武将』デッキを使わせるのかと思ったけど、案外『ブルーアイズ青眼』は俺のイメージカラーに合うから良いんじゃないかねえ？」

黒神

「そうなんです！そしてマヨラーもイメージカラーに合わせてあるモンスターを中心とした魔法使い族デッキを使用します！！」

土方

「何で俺にはマヨラー呼ばわり！？殺すぞ糞作者！！」

黒神

「そんでは始まります」

土方

「聞けやあ！！」

### ID-3 遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスターの攻撃

銀時 LP:3000 手札1枚 伏せカード1枚

フィールド

『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』(攻撃表示・『ドラゴンの秘宝』を装備・ATK3  
3000・DEF2800)

『ドラゴンの秘宝』

『カード・リミットブレイク』

土方 LP:5000 手札1枚

「てめエ、それは世界でも経った4枚しかねえ激レアカードだろうが!! 一体どうやって手に入れやがった!!」

「ああ? 知り合いの人妻好きのへんてこペットを飼ってる馬鹿からもらったんだよ!」

と土方は納得いかない感じで叫びだし、銀時はめんどくさくても答えだす。

だが人妻好きでへんてこペットと言う2つのキーワードを合わせれば、その人物は1人しかない。

「かぶき町にあの『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>が存在すると見て来ては…銀時め、ようやく決闘者<sup>デュエリスト</sup>として目覚めたか」

と新八の隣にいつの間にか黒い長髪に眼帯をかけて黒いコートを着た男がいた。

彼の名は桂小太郎。

攘夷志士の1人であつては銀時と同じく攘夷戦争を駆け抜けた英雄だが、現在は指名手配反と幕府から追われている。ちなみにクールボケで無駄にうざい所が多少ある。

「桂さん!!!」

「ヅラア、いつの間に来てたアルカ?」

「ヅラじゃないキャプテン・カッターだ!」

と新八も神楽も桂に注目する。

しかも桂は相変わらずヅラ呼ばわりされるのが気に入らないようだ。

「新八さん、知り合いですか?」

「ああ、この人は桂小太郎さんと言って銀さんとは盟友関係で今は指名手配反されていますけど良い人なんですよ」

「なるほど、銀さんの…」

銀時の仲間である事に納得する遊星。

だが遊戯達が何より気になるのは桂の隣にいる生命体。ペンギンの様な白い物体である。

「あのう、コレってペンギンか?」

「ペンギンじゃないエリザベスさ」

十代が疑問系に言いだすと、桂が自分のペットっと言うより相棒の



伝説のレアカード『ブルーアイス・ホワイトドラゴン青眼の白龍』は世界でたった4枚存在するカード。

それを3枚も持っている銀時。

伝説のレアカードとも言えるカードをデッキに入っている事には驚かない訳にはいかない。

「ちょ、桂さん！！いくら仲間だからって伝説のレアカードを…それも世界でたった4枚しかない『ブルーアイス青眼』を3枚も銀さんにあげるなんて大胆すぎますよ！！」

「ちなみに『ブルーアイス青眼』はその枚数が世界で4枚しかない事からデュエリスト決闘者なら喉が出るほど欲しがる幻のレアカードの一種とされていて、1枚数千万円以上はしまる」

「数千万円！？マジデカ！！テカモウ大富豪ジャネエ！？」

新八は、そんな激レアカードの中の激レアカードを3枚も銀時に渡した桂に青ざめて叫びだす。

たまが『ブルーアイス青眼』の値段を評価すると、キャサリンは隙があれば奪おうと考えている。

「以前、デュエルモンスターズを実体化させるからくり機械を発明し、江戸を焼き払おうとする天人達の存在を知ってな…そいつ等を天誅下した後にも実験台に使われようとしたカードが3枚の『ブルーアイス青眼』でな…せっかくだからそのカードを悪用されないようにと取り上げて、気まぐれに銀時に渡した訳だ」

「そうなんですか…やっぱり桂さんはデュエルモンスターズをやる暇が無いから『ブルーアイス青眼』を銀さんに」

と新八は桂はデュエルモンスターズに興味がないと思い込む。しかしそれは違った。

「いや、単に俺の使用するデッキとは合わなくてな…せつかくだから銀時にデュエルモンスターズに興味を持たせよう」と…」

「て結局はまってるのかあ！！しかもデッキを持ってるのかよオ！！」

と桂はデッキを取り出して、銀時に『ブルーアイズ青眼』のカードを渡した理由を言いだす。

そんな桂に怒鳴ってツツコム新八であった。

一方の銀時と土方の決闘は、『ブルーアイズ青眼』を召喚している銀時が圧倒的有利である。

(くう、まさか万事屋ごときにここまで押されるとああ、しかも伝説のレアカードを持っていやがるとあ信じられねエ…だが、決闘はパワーだけじゃネエところを見せてやる！！)

「俺のターン、ドロー！！」

土方はデッキからカードをドローすると、そのカードを手札に加えて1枚のカードを発動する。

「魔法カード『光の護封剣』を発動！！」

するとフィールド上に無数の光の剣が振ってきて、銀時のフィールド上を防ぎこむ。

「こいつあ…」

「このカードがフィールド上に存在する限り、相手は3ターンの間は攻撃できない…モンスターをセットして、俺はコレでターンを終

了」

土方はターン終了宣言をする。

「チィ、俺のターンドロォー!!」

勢い良くカードをドロォーするも、ドロォーしたカードは魔法・罠カード除去カードではない。

「チィ…俺はコレでターンを終了!!」(手札2枚)

光の護封剣 1ターン目

「俺のターン、ドロォー!!カードを1枚セットしてターンエンド」(手札1枚)

一方の土方は順境に準備をしている。

銀時を倒す秘策を考えてる。

「俺のターン、ドロォー!!『マンジュ・ゴット』を召喚!!」

とフィールド上に無数の手が生えている守護神があらわれた。

「こいつの召喚に成功した場合、デッキから儀式魔法か儀式モンスターのどちらか1枚を手札に加える!!」

銀時はそう言ってデッキから1枚のカードを手札に加えると、そのカードを発動する。



「儀式魔法、『白龍光臨』：レベル4に合わせるように手札またはフィールド上のモンスターをリリースして、『白竜の聖騎士』する！  
！』『マンジュゴット』をリリースして、来い、『白竜の聖騎士』！」  
と、銀時の場の『マンジュ・ゴット』はリリースされ、フィールド上に1体の白き竜騎士が光臨する。  
白き鎧を身に付けてレイピアの剣を持ち、さらには白き竜を駆る聖騎士の姿が光臨される。

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドロウする！それで、『白竜の聖騎士』の効果で、こいつをリリースしてデッキまたは手札から、『青眼の白龍』を特殊召喚する！！」  
「何イイ!?!」

と、フィールドの聖騎士がリリースされるとフィールド上に2体目の白き龍の姿が光臨される。  
これには土方も驚きを隠しきれない。

「てめえ、まさか『青眼』のカードを3枚も……」  
「ああ…知り合いから3枚ももらっちゃってるんだぜ。それで、『リミット・カードブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドロウ」

と銀時はデッキからカードを1枚ドロウする。

「『白竜の聖騎士』の効果で特殊召喚した『青眼』はそのターン攻撃できませんが、銀時様は攻撃ができなくても戦力を高める準備をしています。しかも『カード・リミットブレイク』の効果で手札は増幅」

「…てか無駄に強くねえ？」

と確かに銀時は決闘者デュエリストでもないのに無駄に強い。

しかし彼は土方の挑発に怒りだしてムカついている所である。

「…チイ、とりあえずターンエンド」(手札3枚)

(まずい…場には攻撃力3000の『青眼』ブルーアイズが2体…速いところしねえと『光の護封剣』の効果が切れちゃったら総攻撃を受けてしま  
う)

このままでは不味いと土方は思つて自分のターンを進める。

「俺のターン、ドロー!!」

勝利を信じてカードをドローする。

ドローしたカードを見てにやりと笑いだす。

「ふふふ…今からテメエに逆転の勝利を見せてやるぜ。魔法カ  
ード『黒魔族のカーテン』を発動!!」

「何イイイイ!？」

と、土方は1枚の魔法カードを発動した。

それをみた銀時はもちろん桂も驚きだす。

「あれは、ライフを半分支払う事によりデッキから最上級黒魔術士  
を召喚する速効召喚魔法カード!!」

「最上級黒魔術士!？」

新八も知っている有名な黒魔術士。

魔法使い族の中でも有名で、誰もが注目する有名な魔術士。

「まさか、テメエあのカードを!!」

「ふふふ……さあ見せてやるぜ、俺のエースモンスターを」

と土方は笑い出して、デッキから1枚のカードを取り出して決闘盤デュエルディスクにセツトする。

「きやがれ『ブラック・マジシャン』!!」

黒魔族のカーテンから姿を現したのは紫の魔法衣に身を包んだ1体の黒き魔術師。

その名は『ブラック・マジシャン』。

主人公、武藤遊戯（と言うよりアテム）が使用するエースモンスターであり攻撃力、守備力共に最高レベル。そんな黒魔術師が土方の前に光臨する。

土方 LP:5000 2500

「ぶ…『ブラック・マジシャン』が来たあ!!」

「主人公の切り札アル!全然マヨラーのイメージが合わないヨ!!」

『ブラック・マジシャン』の存在に驚きだす新八と神楽。

『ブラック・マジシャン』もレアカード中のレアカードであり、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン『青眼の白龍』程じゃないが数万円の価値を誇っている。

「『ブラック・マジシャン』…」

黒魔術士の姿を見て、少し辛そうな表情をしている遊戯。

何やら因縁があるようだ…。

「何と、土方め銀時の『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>に対抗して『ブラック・マジシャン』を持っていようとは」

「へえ、あれが噂の『ブラマジ』かあ」

桂は憎たらしそうに見つめ、十代は始めてみるかのように『ブラック・マジシャン』を見る。

「てんめえ、何で真撰組副長の癖に主人公が使用しそうなカードを持ってやがるんだ!!」

「ばつきやるあ、『ブラック・マジシャン』の『ブラック』は真撰組のイメージカラー何だよ、同じ色だからイメージに合うんだよボケエー!!」

「ええええええ!!そんな理由で『ブラック・マジシャン』を使っているのオオ!?!」

とイメージカラーで選択する土方はまさに銀時と同類の馬鹿。

だがその『ブラック・マジシャン』に合わせるようにと土方は魔法使い族デッキを中心としたデッキを構築したのだ。

「は!いくら『ブラック・マジシャン』とは言え…攻撃力2500じゃ俺の『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>にはかなわねえよ」

「残念だがそうもいかねえ。俺は手札より魔法カード『魔力収束の杖』を発動。フィールド上に存在する魔法使い族モンスター1体を選択し、フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て墓地に送る。墓地に送った枚数分だけ選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで400ポイントアップする」

「げげえ!!」

「アーア、アホノ坂田サンノ場二ハ『ドラゴンノ秘宝』ト『カード・

リミットブレイク』ガ2枚、アノ警官ノ場ノカードハ『光ノ護封剣』1枚、合計3枚デ攻撃力1200ポイント上ガリマス」

と、『ブラック・マジシャン』の杖の先が、フィールド上に存在する魔法カードから魔力を収束して吸い尽くし、力を増幅させる。

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍 ATK3300 3000

ブラック・マジシャン ATK2500 3700

「げえ、最悪だあ!!」

「喰らえやあ、『ブラック・マジシャン』で『青眼』に攻撃、黒・魔・導!!」

すると黒魔術士は杖から漆黒の魔力弾を放ち、それが『青眼の白龍』を跡形も無く破壊する。

「ああああ!!『青眼』があ!!」

銀時 LP3000 2300

「貴様には『青眼』は似合わねエ、さっさと倒してその『青眼』は没収させてもらっ」

「ああ!!てめエ警官の癖に人のカードを奪うってのか!!」

「お前が使うとせつかくの伝説のレアカードも台無しになってしまうからな…その前に『青眼』は全て取り上げてよ  
り有効に使われるようにと幕府で攘夷浪士を削除する為に使わせてやるぜ」

「ぶざけんじゃねえ!!いくら幕府側だからってさっきから好き勝

手言いやがつてえ!!そこまで言うならアンティルールを申し込んでからこいやあ!!」

と土方は銀時から『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>を取り上げようと考え、銀時は怒りだしてアンティルールを申し込む。

「面白エ、もしテメエが奇跡的に勝てるのなら俺のデッキから3枚好きなのくれてやりや、その代わり俺が勝って当然のようにてめエが負けたらその『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>は全て頂くぜ!」

「何この見下されてる言い方、殴って良い?今すぐ殴って良い!」

「ぎ…銀さん、気持ちはわかるけど決闘中<sup>デュエル</sup>に殴るのは辞めたほうが…」

と啞然として言いだす遊星。

「何か、お互いに使用するデッキを間違えていませんか?」

「銀ちゃんが主人公側なのに主人公っぽくないカードを使って、マヨラーはライバル側なのに主人公っぽいカードを使ってるネ。しかも立場が全然違うヨ」

と新八と神楽は呆れて言いだす。

「まあ、別に良いではないか」

「ちょ、桂さん!銀さんが負けたらせつかく桂さんが上げた『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>が真撰組の手に渡ってしまい、攘夷志士達にも脅威になってしましますよ!!」

「安心しろ、そんな愚かな考えをしてる時点で俺は銀時が勝つと思ってる…それに俺がこの決闘<sup>デュエル</sup>で銀時が奴に勝つところを見届けた理由は2つある」

桂は新八に心配されても銀時が勝つと思い込む。

「今まで我等攘夷志士を苦しめた真撰組副長、土方十四郎：決闘<sup>デュエル</sup>とは言え奴が無様に負ける姿を見届ける滅多にない機会だ。そしてもう1つは、奴は決闘<sup>デュエル</sup>にとって大切な事をまだわかってはいない」

と桂は言いだす。

1つ目は攘夷志士らしいが、2つ目の大切なものとは何なのかを気になる新八達。

ブラック・マジシャン ATK3400 2500

「俺のターン、ドロー!!」

と、カードをドローする銀時。

土方の場には『ブラック・マジシャン』と伏せカードが1枚。その伏せカードを軽快すべきじゃないかと銀時は思う。そこで…

「『ミラージユ・ドラゴン』を召喚!!」

と銀時は鏡の様な反射光を放つ竜を召喚する。伏せカードを警戒して選択し召喚したカード。

「『ミラージユ・ドラゴン』か：確かにバトルフェイズの間は相手は罠カードの発動を封じるモンスターか。だが、そんなザコで俺の罠カードが封じられると思ったかあ!!!『六芒星の呪縛』を発動!!」

「何イ!?!」

突如、ブルーアイズ『青眼』の周りを囲んで現れた六芒星の魔方陣。  
それにより、ブルーアイズ『青眼』は動きを封じられる。

「こいつは相手モンスター1体を選択し、選択したモンスターは攻撃する事ができず、表示形式を変更する事もできない」

「チィ、発動できりゃいつでも発動できるって訳かい…カードを1枚セットしてターンエンド!!」(手札1枚)

と再びカードを1枚セットする銀時。

一方の土方は自分のターンを進める。

「俺のターン、ドロー!!魔法カード『魔石の宝玉魔術』を発動。  
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合、デッキからカードを2枚ドローでき、レベル7以上のモンスターが存在すればさらにもう1枚ドローできる!!」

土方はデッキからカードを合計3枚ドローする。  
ドローしたカードを見て、にやりと笑い出す。

「…ふ、行くぜ魔法カード『千本ナイフ』を発動!!自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する場合、相手モンスター1体を破壊する!!消えやがれ『青眼』!!」

と、土方は叫びだして言いだす。

『ブラック・マジシャン』は1000本のナイフを一斉に投げつけて、ブルーアイズ『青眼』を破壊する。

「デメエ!!!!」



「まだまだ…魔法カード『精神同調』を発動し、『ミラージユ・ドラゴン』のコントロールを得る」  
「~~あああああああ~~…！」

すると、特殊な破調が『ミラージユ・ドラゴン』に催眠術をかける。これで『ミラージユ・ドラゴン』は操り人形となって土方の場に移る。

「て待てやマヨラー！！お前、警察の癖に他人のモンスターを奪うつてほとんど泥棒じゃねえかああ！！」

と納得いかない神楽は怒鳴りだす。

「私ノ前デ、盗ミヲ疲労スルトハ良イ度胸ダナアノヤロー！！アレハ私ニ対スル挑戦ト見ルベキダナ？」

バシ！！

「ア痛エ！？」

「対抗心燃やしてんじゃねえよ馬鹿！」

と泥棒として対抗を燃やすキャサリンに呆れて叩くお登勢。

「しかしどうであれ、このままでは銀時様の負けが決まります」

「…どうしてアルか？銀ちゃんの場合には伏せカードが2枚アルよ！」

「それに『精神同調』でコントロールできても、攻撃できない訳じゃ…」

「いや、その姉ちゃんの言うとおりでせよ？」

たまの銀時敗北宣言に、新八と神楽は納得できない。

しかし十代はそのとおりと言う。

「確かに、『精神同調』でコントロールを得たモンスターは攻撃もできず、リリースする事もできない……けど、『ミラージュ・ドラゴン』の効果まで無効にする事はない」  
『あ！』

遊星の言葉に2人は気づく。

「『ミラージュ・ドラゴン』は自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はバトルフェイズに罠カードを発動する事はできない……」

「そっか、銀さんの伏せカードがいくら攻撃カウンター罠カードでもその発動を封じられたら……」

十代が『ミラージュ・ドラゴン』の説明をすると、遊戯も納得する。

「しかも、銀時様のライフは残り僅か2300」

「もしこのままダイレクトアタックが決まれば……」

銀時の負けである。

「さあ、そろそろ無様に負けてもらうぜ……行けエ、『ブラック・マジシャン』……！万事屋にトドメだああ……」

と土方が叫びだして攻撃宣言をする。

『ブラック・マジシャン』は一気に杖から魔力を収束し、黒き魔力弾を放つ。

コレで決まった……と思いきや。

「あめえよ大神君…速効魔法『奇襲の竜』!!」

「何!？」

「自分の場にモンスターが存在せず、相手の場に2体以上のモンスターが存在する場合のみ発動可能! デッキからレベル4以下のドラゴン族1体を特殊召喚する!!」

如何に罨カードが封じられても、速効魔法は別である。

ちなみに速効魔法は、セットすれば相手ターンでも発動できる特殊魔法カード。

「『デコイドラゴン』を守備表示で召喚!!」

フィールド上に現れたのは、可愛らしい幼竜。

攻撃力300、守備力200と弱いドラゴン。しかしこのドラゴンは特殊な効果を持っている。

「チイ、また厄介なザコを召喚しやがったか!」

「ぶははははは、そのザコに勝利をかき消されたテムエはザコ以下のザコだがなあ!!」

「にやるく!! 魔法カード『生贄の壺』を発動し、『ミラージユ・ドラゴン』をリリースしてデッキからカードを2枚ドローする!!」

土方はカードを2枚ドローする。

だがドローしたカードの中には、土方が欲しがるカードは無かった。

「チイ、ターンエンドだ!!」(手札2枚)

舌打ちしてターンエンドする土方。

「なるほど、『デコイドラゴン』は手モンスターの攻撃対象になっ

た時、自分の墓地からレベル7以上のドラゴン族モンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚し、攻撃対象をそのモンスターに移し替える効果を持っています」

「銀さんの墓地には2体の『青眼』ブルーアイズが存在するから、しばらくは護りきれぬ!!!」

たまと新八はまだ勝機は残されていると確信する。

「じゃあ、俺のターン…ドロー！俺はこのままターンエンド!!!」（手札2枚）

かと言って銀時も今は対策できるカードはない。

「俺のターン、ドロー!!!」

と土方は勢い良く、カードをドローする。

ドローしたカードを見て、にやりと笑いだす。

「取って置きを見せてやるぜ…魔法カード『合成黒魔術の儀式』を発動!!!自分フィールド上とデッキから、融合モンスターカードによつて決められた魔法使い族モンスターを含むモンスターを除外して融合する!!!」

「何イイイイ!!!」

「この場で融合と言えば…不味い、土方さんはあのドラゴン天敵モンスターを召喚するつもりだ!!!」

新八は土方が融合召喚するモンスターは一体何なのかを予想する。

「場の『ブラック・マジシャン』とデッキの『バスター・ブレイダー』を融合!!!」

とフィールド上に竜破壊騎士が現れて、時空の渦に飲み込まれた黒魔術師と竜破壊騎士。

二体のモンスターが融合して、1体のモンスターが現れる。

「『超魔導剣士・ブラック・パラディン』を融合召喚!!」

フィールド上に1体の超魔導剣士が光臨した。

攻撃力2900で守備力2400。

『コスモクイーン』と並ぶ攻撃力を誇るが、『ブラック・パラディン』は銀時の使用するドラゴン達の天敵である。

「こいつが俺のデッキ最強のモンスターだ。『ブラック・パラディン』はお互いのフィールド上と墓地に存在するドラゴン族の数だけ500ポイント攻撃力をアップさせる」

「げえ、マジかよ!!」

「やべえ、銀さんのフィールド上に存在する『デコイドラゴン』と墓地に眠るドラゴンは16体!!」

十代はやバイと言いだす。

つまり、超魔導剣士の攻撃力は8000ポイントアップして攻撃力は…

超魔導剣士・ブラック・パラディン    ATK2900    10900

「攻撃力10400!? 神のカードでも絶対にそこまできませんよ!!」

「大丈夫ネ、新八!! 銀ちゃんの場の『デコイ・ドラゴン』がいる

限りドラゴン再生効果は続くある！」

と心配ないと言いだす神楽。

だが…

「そのザコの効果は封じさせ手やりや！！魔法カード『禁じられた聖杯』！！モンスター1体の攻撃力・守備力を400ポイントアップしてその効果も無効にする！！」

「何イイイ！？」

『デコイドラゴン』は聖杯に入った水を浴びせられ、力が増幅した変わりに効果を失う。

デコイ・ドラゴン	ATK300	700	DEF200	600
----------	--------	-----	--------	-----

「『ブラック・パラディン』でそのザコを攻撃イ！！超魔導無影斬！！」

超魔導剣士は剣杖を強く握り、大きく振り回して『デコイドラゴン』を一刀両断にする。

「ちい…すまねえな『デコイドラゴン』」

「ふふふ…コレで次のターンで終わりだ…ターンエンド！！」（手札1枚）

と土方は余裕を持ってターンエンド宣言をする。  
しかも油断はしていない。

「『ブラック・パラディン』には手札を1枚墓地に送る事で相手が発動した魔法カードを無効にして破壊する効果を持っている…このままじゃ銀さんが負けてしまう」

と、思い込む遊戯。

しかし…

「ふ、アレぐらいで銀時が諦めると思ったか？」

『…!?』

と誰もが諦めモードになる中、桂だけは違った。

「見る、あの銀時の眼を…あの眼はまだ諦めていない眼。次のターンで決着をつけるつもりでいる」

と桂は思っただけです。

何せ銀時は土方だけには絶対に負けたくないのである。

「いくぜ、ファイナルターン!!」

と潔くカードをドローする銀時。

今の台詞は違うカードゲームをする人物の台詞である。

ドローしたカードを見て、ニヤリを笑いだす。

「魔法カード『地割れ』!!そのモンスターには退却だ!!」

「ざっけんな!!そんな事させるかよ!!『ブラック・パラディン』のモンスター効果、手札を1枚墓地に送って魔法カードの発動を無効にして破壊する!!破魔・超激烈斬!」

超魔導剣士は剣に魔力を込め、その剣を振って魔力を込めた斬撃を

放って『地割れ』の効果が無効にして破壊する。

「どうだ、コレでてめエの反撃も…」

「コレでてめエの手札は尽きたなあ」

「何!？」

そう、コレはあくまで罠であった。

「カードを1枚セットし、魔法カード『命削りの宝札』!!デッキからカードを5枚ドロして5ターン後に手札を全て墓地に送るぜ!!」

と銀時の手札は0。

よって5枚ドロする。

「おいマヨラー。コレで俺の勝利は確定したぜ…魔法カード『闇の量産工場』を発動…こいつで墓地に存在する通常モンスターを2体選択して手札に加えるぜ…2枚の『青眼』ブルーアイズを手札に加える!!」

と銀時は墓地の『青眼の白龍』ブルーアイズ・ホワイトドラゴンを2枚手札に加えると…墓地にドラゴン族が減ったことで超魔導剣士の攻撃力が下がる。

超魔導剣士・ブラック・パラディン    ATK10900    9900

「見せてやるぜ、究極竜の存在を!!『融合』発動!!」

「なあ!!」

「まさか!!」

「銀ちゃん、あのモンスターを召喚するアルカ!？」



と土方はもちろん、新八や神楽達も銀時が融合するモンスターは何なのかを注目する。

銀時は手札から3枚の『青眼の白龍』をフィールド上に出すと、時空の渦が発生する。

「いくぜ、『青眼』3体融合ー!!」

時空の渦が現れ、3体の「青眼」は融合して1体のドラゴンとなる。

「『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン』  
青眼の究極竜』!!」

と、時空の渦が爆発する。

そして爆発の中から1体の3頭竜が光臨する。

三頭の額に紋章が刻まれ、サファイアの如く輝きだす瞳。

そしてとてつもなく放たれる闘志。

その名は『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン』  
青眼の究極竜』。

攻撃力は神をも超える最強のドラゴンである。

「ぶはははははははははは！！どうだ、コレぞ史上最強にして究極ドラゴンの姿だあ！！」

『『うおおおおおおおおおおおおおおおお！！』』

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
『青眼の究極竜』の登場に、神楽、十代、キャサリンの3人は思わず叫びだす。

伝説のドラゴン3体の融合した姿など、生では絶対に見られない。  
しかもゾビットビジョンなのに、何故か銀時は『青眼の究極竜』の中心の頭の上に乗っている。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ……」ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
『青眼の究極竜』！？嘘オオオオオオ！！本当に召喚しちゃったよ銀さん！！」

「まさか、伝説の究極竜をこの眼で見られるなんて……やはり銀さんは凄い決闘者なんだ」デュエリスト

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
新八も『青眼の究極竜』の存在に思わず腰をぬかし、遊戯は銀時に尊敬心を抱く。

「……………は、ば……馬鹿かテメエは！！何が究極のドラゴンだ！！いくら攻撃力4500の切り札を召喚したところで、『ブラック・パラディン』はその上に行く！！しかもドラゴンが増えてさらにパワーアップするぜ！！！」

と土方は一瞬、ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
『青眼の究極竜』に見とれるが、我に戻って状況を言いだす。

超魔導剣士 ブラック・パラディン ATK9900 11900

「だったらそれを超えるまでよ…装備魔法『巨大化』!!コントロ  
ーラーのライフが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力を  
倍にする!!」

と徐々に巨大化していく白き究極竜。

その分だけ攻撃力が倍になり、脅威の9000となる。

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
青眼の究極竜 ATK4500 9000

「だ…だからなんだ!!いくらパワーアップしようが俺の『ブラッ  
ク・パラディン』にはおよばねえよ!!」

「それが可能だなあ」

と憎たらしく笑う銀時。

「『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン青眼の究極竜』で『ブラック・パラディン』に攻撃!!」

「ちよ、銀さん!?!」

攻撃力はまだ超魔導剣士の方が上なのに、銀時はそのまま白き究極  
竜に攻撃宣言をする。

そして究極竜はそれぞれ3頭のアギトを開き、そこにそれぞれ白き  
粉子を収束する。

「何やっているんですか銀さん!?!」

「むちゃな!!そんな事をすれば逆に返り討ちにされる!!」

と遊戯も遊星も無謀だと思っ中…

「いや、銀時はアレを狙っている…！」

『『え？』』

と桂が銀時は何か狙ってると言いだす。

「ああ、おそらく銀さんはあの伏せカードを今ここで使っつもり何だ」

と十代も気づいて、銀時が伏せてある1枚のカードを指差す。それが銀時の勝利を導くカード。

「いくぜ、罠カード『オーラチャージゾーン』！！セットされているこのカードの正面に存在する自分のモンスターが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合のみ発動可能！ そのモンスターの攻撃力はダメージ計算時の間だけ攻撃力が倍になる…！」

と、さらに体全体に蒼白い闘志を放つ『ブルーアイス・アルティメットドラゴン青眼の究極竜』。  
その攻撃力はさらに増幅されて、超魔導剣士を圧倒的に上回る。

ブルーアイス・アルティメットドラゴン  
青眼の究極竜 ATK9000 18000

「何イイイイ！！攻撃力18000だとオオオオ！！」

「て滅茶苦茶高エエエエエエ！！」

いくらなんでも高すぎる攻撃力に、土方も新八も驚きだす。  
そして勝負はこの瞬間に決まった。

「さあ、ファイナーレの時間だ……」フルーアイズ・アルティメット・エナジー『青眼の究極竜』、俺の怒りを込めて、全てあのマヨラーにぶつけるオオー!!」

そして3頭のアギトに溜められたエネルギーは一斉に放たれる。

「アルティメット・バースト!!!!!!」

3つの巨大な白き閃光があわせだして、極大な白き閃光となって放たれる。

圧倒的な攻撃力の前では、流石の超魔導剣士とは言え対抗できない。そして無残にと白き閃光に飲み込まれて消滅していった。

「ちい!!」だが墓地の『ガーディアン・マジシャン』の効果発動!! 墓地にあるこのカードと墓地の魔法カード2枚をゲームから除外する事で俺が受ける戦闘ダメージを0にする!!」

と天使の様な水色の魔導衣装を身に付けた守護魔術士が現れ、魔力で固めた転壁がその衝撃を防いだ。

これで土方はダメージを受ける事は無く護りきれた。

「いつのまに、あのカードを!？」

「まさか、『ブラック・パラディン』の効果で捨てたカードはアレ





遊戯も銀時の滅茶苦茶な強さに青ざめる。

「だけど、銀さん決闘者<sup>デュエリスト</sup>としても全然強えじゃん！」  
「ああ、下手すれば俺達以上な人かもしれない」

十代と遊星は銀時の強さを高く評価する。

『青眼<sup>ブルーアイズ</sup>』を3枚も持っているだけじゃない、さまざまなかードでピ  
ンチを凌いで一気に勝利につなげたのだ。

「ふ、決闘<sup>デュエル</sup>とは言えあの真撰組の鬼の副長を倒すとは…流石だな銀  
時」

『よ、お見事!!』

桂もエリザベスも、真撰組の無様な敗北を見て大満足のようなうだ。  
お登勢、キャサリン、たまの3人はようやく終わったと呆れて店に  
戻る。

そして3体の『青眼<sup>ブルーアイズ</sup>』のゾビットビジョンは消えて、銀時は憎たら  
しく敗北して倒れている土方の散らばったカードを拾い集めて土方  
に返す。

「さあ、約束どおりてめえのデッキから3枚のレアカードは貰  
って置くぜえ」

と銀時は『コスモクイーン』・『魔導戦斧士・バルディッシュ』・エ  
ニユオ』・『ブラックマジシャン』の3枚をポケットに入れる。

『コスモクイーン』はどこかのカードショップに売ればかなりの価  
格で売れそうだと嬉しそうに笑う。

『ブラックマジシャン』も良く見れば滅多に手に入らない初期版の  
カードであり、どこかで売れば高く売れる。



つまり今月の家賃を思わぬ形で問題解決出来そうだ。

「後、今デュエルモンスターズにはまってるてめえに言っておくぜ？ 決闘デュエルの勝敗を決めるのは1枚のカードだけってのはかぎらねえ。弱いカードをザコと呼ばわりして、1枚の強力なカードを頼ろうとしてる限りは俺に一生勝つ事は出来ねえよ」

とはつきり言いだす銀時に悔しがる土方。

「最後にてめえに言いてえ事があるけど、良いかなあ？」

と憎たらしく笑いだす銀時。

顔中に血管を浮かべて睨みつける土方を無視し、空気を大きく吸って…

「ま・け・い・ぬウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！」

と大きく土方に向けて叫びだすと…土方は思わず、

「ヂクヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

と顔中に青筋を浮かべて剛泣し、叫びだす。

そしてすぐに立ち上がって凄まじい速さで走りだす。

「覚えていやがれエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！」

「ちよつとおおおおお、それ明らかに敵ザコが言いそうな台詞なん

ですけどオオオオオ!?」

と青ざめて叫ぶ新八。

だが土方の姿はもう見えなくなった。

「あー、すつごくすつきりした〜」

「最悪だよこの人！ 主人公とは思えない悪童感があふれ出ているんですけど!?!」

「やっぱ馬鹿アル」

「わん!」

「まったくアイツは」

『幕府より酷い』

「あ…あはははは…」

「あそこまで言うか!?!」

「……………」

と憎き土方を倒して大満足してすつきりした銀時。

そんな彼に軽蔑する新八、神楽、定春、桂、エリザベス、苦笑して笑う遊戯、呆れている十代にだんまりと啞然とする遊星。

だが土方はこの決闘デュエルにより、予想外の変貌をしてしまう事になる。

登場オリカ

魔力収束の杖

速効魔法

『自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター1体を選択し、フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て墓地に送る。』

墓地に送った枚数分だけ選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで400ポイントアップする『』

### 魔石の宝玉魔術 通常魔法

『自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合、デッキからカードを2枚ドローする。』

また、自分フィールド上にレベル7以上の魔法使い族モンスターが存在すればさらにもう1枚ドローできる『』

### 奇襲の竜 速効魔法

『自分の場にモンスターが存在せず、相手の場に2体以上のモンスターが存在する場合のみ発動可能。』

デッキからレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する『』

## 合成黒魔術の儀式

『自分フィールド上とデッキから、融合モンスターカードによって決められた魔法使い族モンスターを含むモンスターを除外し、魔法使い族の融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚扱いとして特殊召喚する』

## 命削りの宝札 通常魔法

『手札が5枚になるようにカードをドローする。  
発動してから5ターン後（自分のターンを数えて）、自分のドローフェイズ時に自分の手札を全て墓地に送る』

## オーラーチャージゾーン 通常罫

『セットされているこのカードの正面に存在する自分のドラゴン族モンスターが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合のみ発動可能。  
そのモンスターの攻撃力はダメージ計算時の間だけ攻撃力が倍になる。  
ターン終了時にそのモンスターを破壊して、コントローラーにその元々の攻撃力分のダメージを与える』

ガーディアン・マジシャン      2      光属性      魔法使い族      ATK 0  
DEF 0

『相手モンスターの攻撃で戦闘ダメージを受ける場合、自分の墓地に存在するこのカードと魔法カード2枚を選択してゲームから除外する事で、その戦闘ダメージを0にする』

土方十四郎

使用デッキ 『ブラック・マジシャン』を中心とした魔法使い族デッキ。

魔法カードの連携を得意としている。

デッキ名 『真撰組の黒魔術師』

主力カード 『ブラック・マジシャン』

フェイト

「て、ちゃんとこっちの小説も書けえええ!!」

と『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争鎮魂歌』のヒロイン、フェイト・テストアロツサが怒りだして『バルディッシュ』から金色の魔力砲を放って、その魔力砲が黒神を飲み込む。

黒神

「ごめんなさあ〜い!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1127y/>

---

銀魂王 - デュエルモンスターズ SD

2011年11月1日02時10分発行